

松橋 七郎（まつはし・しちろう）

1、プロフィール

小説家。社会運動家。東奥日報等、新聞雑誌に農民小説を発表、高い評価を受ける。また同人雑誌「青森文学」創刊に参画。力作を発表。早世が惜しまれた作家である。

<生没>

1912(明治 45)年2月 11 日 ~ 1958(昭和 33)年 12 月 17 日

<代表作>

短編小説「瀕死のサンと共に」「東三郎と始末書」「蝕土」「風土」「不正受給金」「白道」「三等病室」

<青森との関わり>

西津軽郡車力村に生まれる。後に青森市に住む。青森市で発行の同人雑誌「青森文学」に拠り作家活動を展開する。

2、作家解説

明治 45 年2月 11 日、西津軽郡車力村大字富范字藪分に生まれる。本名武男。昭和2年富范尋常高等小学校卒業、10 年間農業に従事する。青年篤農家の評判をとり、青年団長に選ばれ、読書家でもあった。東奥日報の新年文芸、小品文に「秋の洪水」(昭和7年)が入選。松橋七郎名で書いた「半之丞と五月」が「サンデー東奥」(昭和8年8月 10 日号)の懸賞当選作となる。この農民小説により「アカ」のレッテルをはられたことから、巡査等弾圧側の体制内に入り、自分なりの巡査像を造型しようとする。13 年4月県巡査教習所に入学、8月卒業。以来 21 年8月、依頼退職するまで青森県警察署管内各署に勤務する。

21 年 10 月、日本社会党へ入党。創作、党活動に専念する。22 年、県農業会募集小説に「東三郎と始末書」一位入選。解放農民の未来を暗示、初期作品に比し格段の力量を感じさせるものと好評を得る。26 年・27 年には東奥日報に「春風、地

酒」「林檎の花の咲く頃」「かとの吸物」「堆肥の匂」を発表。ふるさとの農村生活がテーマの作者の善良な人柄がしのばれる小品である。また、アカハタ日刊記念懸賞創作募集に「蝕土」(100枚)を応募、予選作12編に入っている。

31年11月、同人雑誌「青森文学」創刊に編集委員として参画。沫霸志の筆名で1・2号に「風土」(上下)を発表。32年、3・4号に「不正受給金」、5号に「白道」と矢継ぎ早に発表。いずれも社会小説的な視野に立つ意欲的な作品である。32年の第2回東奥日報小説賞に「三等病室」を応募、佳作に入る。「軽やかな筆致とアクぬけた描写は氏の文学的進境と思想的広がりを示してあまさなかった」(伊狩章)と高く評価されるに至る。昭和33年12月17日死去。享年46。企画運営に心血をそそいだ日本社会党県連第4回大会終了3日後のことである。昭和34年2月発行の同人雑誌「青森文学」7号は「松橋七郎追悼号」を編集。遺稿「瀕死のサンと共に」を掲載、淡谷悠蔵ら関係者が文をつらね、その早かった死を追悼した。

3、資料紹介

○「瀕死のサンと共に」

雑誌

1959(昭和34)年2月10日

200mm×145mm

昭和34年、同人雑誌「青森文学」7号(松橋七郎追悼号)発表の短編小説。第一稿「病めるサンと共に」(昭和33年)を書き改めたもので遺稿となった作品。一組の夫婦の葛藤を病気の猫「サン」を点綴しながら、小市民の人間模様の哀歓を巧みに描いた短編小説。